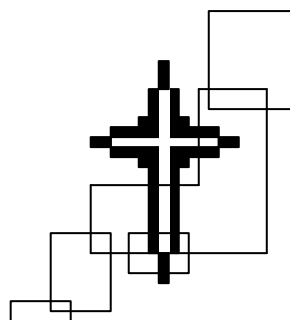


日本のための とりなし

わが国のために祈りましょう
ニュースレター7月号
2001年7月1日発行



日本のためのとりなしの会

*事務局：〒228-0802 相模原市上鶴間 6-1-17 皆川方

TEL042-747-5703, FAX042-746-2119

URL: <http://www.Christ-ch.or.jp/>

電子メール: otoiawase@christ-ch.or.jp

*振替：00270-7-6421

*委員：(長)皆川 尚一(神奈川県)

友納 徳治(福岡県)

手束 正昭(兵庫県)

林田 金弥(神奈川県)

行澤 一人(大阪府)

久保 有政(埼玉県)

「日本の『民族的贖い』のために～ その意義と聖書的基础付け～」

行澤 一人

— クリスマスが「日本のために祈る」というとき、従来はともすると「個人としての」日本人が主にあって救われて、救われる個人の数が大きく伸びることを「リバイバル」と呼び、ひたすらこれを祈り求めるといことがなされてきました。もちろん、私達の痛切な願いは、一人でも多くの日本人が、個人的に、主イエスにある本当の救いと解放を体験してくださることであり、これはもはや願いというよりも、「うめき」であり、「叫び」でありましょう。しかし、問題は、「その先」であります。リバイバル後の日本のキリスト教ないし教化された日本社会の姿が、今、クリスマスには「見えて」いるのだろうか、あるいは「この国はキリストにあつてこうなる！」という明確なゴールを、ビジョンとして提示することができるのだろうか、ということです。このような問題提起に対しては、「そんなことはリバイバルが起こってから考えたらいい」「リバイバルが起これば神様の方で良いようになされる」といった反論が聞こえてきそうです。しかし、私は、この国の現状を冷厳かつ客観的な目で見据えるならば、

戦略無き、やみくもな個人の「救霊」一本槍の宣教が、かえって個人の救霊という実をも得がたくさせているのではないかと感じています。つまり、今日までの日本宣教の現実から学べることは、従来の個人主義的な宣教パラダイム(思考や行動の枠組み)自体を大きく変更しなければならないのではないかと、思うのです。というのも、日本人の思考・行動様式は、常に様々なレベルにおいて自己の所属する「共同体」の一員としての自己認識を前提とするものであります。これに対して、そのような「共同体」に対する何らの配慮も伴わない個人主義的な「救い」を提示する、いや場合によっては「共同体」そのものが、個人の救いにとってただ敵対的なものとしてだけしか提示されないというのでは、そもそもそのようなものが価値ある「救い」として日本人に受け止められにくいのも当然でありましょう。やはり、個人の「救い」ということの上に、さらに自らが属する「共同体」が贖われることへの希望を語り、そのビジョンを明確に提示すること；「あなたの救いはそのための端緒であり、それはあなたに託された神様よりの特別のミッション、即ち使命なのだ」というように励まし、動機付けていくことが極めて重要であるように思うのです。日本という国や文化全体が、リバイバルを経て、どのような形に変えられていくのか - 歴史の喪失や過去の忘却としてではなく、まさ

に邂逅であり、完成であるような仕方において！ - そのところの具体的なイメージを積極的に提示していくことが重要であると思っています。本会の「日本のためのとりなし」のはたらきも、まさに、以上のような視点において、キリストの体なる教会の中において、非常に重要な働きを担うものと確信しているのです。

問題は、では、このような「日本の民族的贖い」というのは、聖書的にどのように基礎付けられるのか、ということですが、この点を説明する基礎理論として、私は、既にリバイバル新聞に掲載された論説（以下、リバ新論説と記す）の中で「贖われた日本主義論」を展開いたしました。ここでは、再度、それを要約する形で展開したいと思います。

（ア）まず、人間が神の似姿として創造されたという事実の偉大さが全ての議論の出発点である。人間という存在は、本質的には神と交わり得る霊的存在として創造されている。では、その後の「原罪」とエデンの園追放は、人間の「神の子」性にどのような影響を与えたのか？それは、本質的に「神の子」性を喪失したということではなく、むしろ神の所有から悪魔に隷属する身分に墮落したということであって、「所有関係の変更・悪魔による不法横領」として捉えるべきである。キリストによる救いとは、この本来神の賜物である神の子性の奪還と回復に他ならない。そうだとすれば、未だキリストの救いに預かっていない人間の神の子性というのは、悪魔に不法占有・不法利用されてはいるが、潜在的には神の子としての賜物を「可能的に」保持しているということができる。以下、リバ新論説2000年6月18日付けから引用。

「・・・人間の墮落と救いというのは、神のかたちとしての人間の本质が変質することを意味するのではなく、むしろ誰にあるいは何に帰属するのかという「所有関係」あるいは「地位と身分」の関係に関わるものである。つまり、神の所有となるのか、サタンの所有となるのか、の違いである。人間が徹底的に罪に墮落しているということも、人間性の本質が変質してしまっているというよりも、む

しろサタンの所有と束縛の中で、もはや自分では脱出しようのない状態、つまり「奴隷の地位と身分」にあることを示しているのである。だから、サタンの圧制から贖われたならば、（もちろん痛めつけられてきたので癒しと解放が不可欠だが）、本来神様に与えられていたユニークで豊かな人間性が花開く。キリストの似姿にまで変えられていくのである（第二コリント3;18）。」

（イ）もし、未だキリストの救いにあずからざる人間の地位がそのようなものだとしたら、そのような人間によって創造された文化や民族というものは、どのようなものとして理解されるのか。

（イ-1）民族や文化という現象は、人間に固有のものである。なぜなら、人間というのは、人格的存在であり、それは本質的に「交わる」存在だからである。そして、「交わり」は、「共同体」を形成する。また、人格的存在であるということは、人間は本質的に「歴史性」を帯びた歴史的存在であるということの意味する。この共同体性、歴史性というものが、民族や、文化というものを形作る。この点、以下リバ新論説2001年6月3日付けから引用。

「ところで、人はただ霊のみから成るのではなく、心とからだをも持つ「人格」として存在する。また、人は「交わる存在」であり、それゆえに共同体を形成し、その共同体に固有のユニークな行動規範とコミュニケーションのあり方を生み出していく。ここに「文化」が形作られることになる。もちろん、いのちは霊にある。しかし、霊の働きは身体性を獲得することによって、文化という表現形態を持つ。神が人間をこのように人格的存在として創造されたということからして、人の創る文化もまた、神の創造の表現であるということができるのである。」

（イ-2）そして、このように民族や文化ということが、人間存在の本質的な帰結だということと、（イ-1）の結論を併せて考えると、未だキリストの救いにあずからざる人間が産み出す民族性や、文化ということも、潜在的には人間の神の子としての本質から生じてくるものであり、可能性としては、潜在

的な神の賜物性を有しているということが言える。ただ、悪魔の支配の中であって、神の賜物が濫用されている状態であるということが言える。

(イ-3)民族性や、文化というのは、本来、バラエティに富んだものであり、ユニークな個性を持っている。(イ-2)の結論をこれと併せて考えると、創造の神様は、この人間の作り出す民族性や文化というものの多様性、個性というものを喜んでおられる、いやむしろこの多様性こそ神の創造の特性であるとさえ言える。ただし、悪魔の支配の中では、この多様性や個性ということが、むしろ優越意識や差別感情、相互不信、憎しみ、ねたみといった罪によって汚され、呪いの原因になる。

(ウ)もし、個人としての人間にキリストの贖いが適用され、本来のユニークな創造の賜物が回復されるのだとしたら、民族や文化といったものの救い、贖いということも、まさに「その個人の救いという経験の場において」こそ、起こってくるはずである。なぜなら、人格的存在としての人間は、本質的に特定の民族、文化に属する存在であり(世界-内-存在)、かつそのような人格的存在性から生じてくる民族や文化というものも、本来は神の創造の賜物であるということがいえるのなら〔(イ-2)〕、人間個人の救いというものが、その属する文化性、民族性の贖いということと切り離されて起こると考えることは不自然であり、また妥当ではない。

(エ)そして、本来民族性や文化というものの本質が、多様性、個性ということにあるとすれば〔(イ-3)〕、人間存在の贖いの中で起こってくる民族性、文化性の贖いということも、個性の回復、多様性の中での回復ということになるはずである。このことの意味するところは、全ての諸国民、諸民族が、共にイスラエルの王である主イエスを王の王として崇め、迎えるとき、それぞれの多様性や個性が、敵意やねたみの原因となるのではなく、むしろ相違自体がお互いを補い合い、助け合い、建て上げあうという祝福へと変えられる - 多様性を皆で喜び合うことができるようになる - ということであり、これこそ神の

国の姿ではないか、と思う。以下、リバ新論説 2000年6月18日付けより引用。

「社会や国、文明や文化というのも、人間存在の本質に根ざす「共同体性」や「歴史性」、「地域性」や「個別性」といった性格の表現に他ならない。そして、それが「神の似姿」としての性質に由来しているとしたら、これらもまた神様の創造作品と言えるのである。それぞれの時代、地域においてユニークに花開いてきた国や社会、文明や文化も、本来は神様の栄光の現れとしての潜在性を秘めている(使徒 17;26 以降のパウロの言説を参照。あるいは申命記 32;8)。神様は、人間を救い贖われるとき、人間の個人としての側面を最も重んじられるが、それとともにその人間の一定の文明、文化、共同体に帰属する歴史的存在としての側面をも重要視されているように思う。つまり、私は一個の人間として救われたのと同時に、現代に生きる日本人として、男性として、その歴史と文化の中にあるものとして救われたのである。そして、私に備えられた神様の召命と目的が回復されるとき、それは現代日本人男性としての私の属性と切り離しては考えることができない。だから、日本という国と文化のために神様が備えておられた創造の意図と目的が、まず私という存在の救いの中であって回復され、啓かれるとき、それを通して、日本という国と文化に光が与えられる。そして、多くの人が日本であって救われてくるほど、日本という国にもより多くの光を当てられて、こうして日本という国と文化自体が本来の目的と意図を、神様の光の中で回復していくことになるのである。」

(オ)以上を裏付ける御言葉の根拠を下記に示す。

(オー1) 国、時代、民族というものは、実に神の経緯によって定められたものであることが分かる。

・申命記 32;8 「いと高き方が、国々に、相続地を持たせ、人の子らを、振り当てられたとき、...」

・使徒 17;26 「神は、一人の人から全ての国の人々を作り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。これは、

神を求めさせるためであって、・・・」

(オー2)

・以下の御言葉を読むとき、主が、イスラエル以外の国民、民族にも、顧みを与え、民族としての救い、贖いを約束し得ることが分かる。

イザヤ書 19:19~「その日、エジプトの国の真中に、主のために、一つの祭壇が建てられ、その国境のそばには、主のために一つの石の柱が立てられ、それがエジプトの国で、万軍の主のしるしとなり、あかしとなる。彼らがしいたげられて主に叫ぶとき、主は、彼らのために戦って彼らを救い出す救い主を送られる。そのようにして主はエジプト人にご自身を示し、その日、エジプト人は主を知り、いけにえとささげ物をもって仕え、主に誓願を立ててこれを果たす。主はエジプト人を打ち、打って彼らをいやされる。彼らが主に立ち返れば、彼らの願いを聞き入れ、彼らをいやされる。その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手で作ったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」」

(オー3)

・千年王国期の預言と解されるゼカリヤ書にも、エルサレムを中心として、諸国、諸民族が仮庵の祭りに登ってくる様子が記されている。

ゼカリヤ書 14:16~「エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。地上の諸民族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエル

サレムへ上って来ない民族の上には、雨が降らない。もし、エジプトの氏族が上って来ないなら、雨は彼らの上に降らず、仮庵の祭りを祝いに上って来ない諸国の民を主が打つその災害が彼らに下る。これが、エジプトへの刑罰となり、仮庵の祭りを祝いに上って来ないすべての国々への刑罰となる。」

(オー4)

・黙示録7章9節において、天の礼拝の光景にあって、そこには「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから」救われた群衆が、神と子羊の前にやってきている様子が描かれている。ここで、彼らは、ヨハネが見て、すぐそれと分かる民族的特長や特質を備えていたはずである。つまり、そこでは、彼らは、個人としての個性以上に、民族や国民としての個性を帯びた者として神の前に立っているであり、それらの相違が、子羊なるキリストを崇めることにおいて、多様性の一致とも言うべき美しいハーモニーを奏でているのである。もし、民族や、国民という概念が、聖書の救済や贖いということと無関係なのだとしたら、このような表現は不必要かつ無意味になるはずである。

・同様の記述は、黙示録21章24節から27節にも見られる。

黙示録 21:24~「諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。」

諸国、国民という区別が、ここに描かれているはずの「新天新地」「新しいエルサレム」においてもはっきりと維持されているということが分かる。ここに書かれた諸国、国民というのが、「贖われた」異邦(非ユダヤ)民族でなくて、何であろう。

地域別とりなし祈禱会

1. 北海道

札幌市 : キリスト公会 札幌グレイス教会 皆川尚一牧師
〒001-0032
札幌市北区北 32 条西 5-3-27
TEL 011-717-1801 毎月第 2 日曜日午後 2 時

2. 岩手県

水沢市 : ザ・リバイバル・東北祈りの家 高橋範明
〒023-0813 水沢市中町 26 レストラン・プレイズ
TEL 0134-62-3561 毎月第 3 日曜日 午前 7 時 00 分

3. 埼玉県

蕨市 : 蕨とりなし祈禱会 鷺谷世嗣兄
〒335-0003 蕨市南町 3-3-12
TEL0484-42-0967 毎月祝祭日午後 2 時

4. 東京都

東京都内 : 東京中央とりなし祈禱会 皆川尚一牧師
* 会場 早稲田奉仕園セミナーハウス(東京都新宿区西早稲田 2-3-1)
* 連絡先 〒228-0802 神奈川県相模原市上鶴間 6-1-17 皆川尚一牧師
TEL042-747-5703、FAX042-746-2119 毎月第 3 月曜日午後 6 時 30 分 ~ 9 時

東京祈禱会 山浦もと姉
* 会場 キリスト教婦人矯風会館 B - 1(新宿区百人町 2-23-5)
* 連絡先 〒350-0812 埼玉県川越市下小坂 612 主の園 3-25 山浦もと姉
TEL0492-34-7049,FAX0429-31-5552 毎週第 1・第 3 月曜日午後 6 時 30 分

5. 神奈川県

横浜市 : 聖書とお茶の会 吉田久子姉
〒241-0836 横浜市旭区万騎が原 8-9 吉田方
TEL 045-363-5657
毎週金曜日午後 2 時

相模原市 : キリスト公会相模大野教会 皆川尚一牧師
〒228-0802 相模原市上鶴間 6-1-17
TEL 042-747-5726,747-5703 FAX 746-2119
URL <http://www.Christ-ch.or.jp/>
Email otoiawase@christ-ch.or.jp
毎月第 2 水曜日午後 7 時 15 分、毎月第 2 木曜日午前 10 時 15 分

6. 長野県

小県郡 : 丸子町キリスト教会 松吉理枝子牧師
〒386-0404 長野県小県郡丸子町上丸子川原 1710 - 1
TEL 02684-2-5264 毎週水曜日午後 7 時 30 分

7. 静岡県

静岡市 : リビングウエイ・チャーチ リッキー・ゴードン師
〒420-0841 静岡市上足洗4丁目6-16-7
TEL 054-248-4058 毎月第1日曜日午後2時

8. 京都府

京都市 : キョート・プレイヤーグループ シスター・イヴァ・フランシス・チェレギーノ
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル カトリック会館5F
TEL 075-241-3867 毎週火曜日午後7時 英語の祈禱会

9. 大阪府

寝屋川市 : 日之出キリスト教会 滝本千歳牧師
〒572-0835 寝屋川市中木田町26-9
TEL&FAX 0720-22-9232 毎月第3木曜日午後2時

10. 兵庫県

高砂市 : 日本キリスト教団 高砂教会 手束正昭牧師
〒676-0015 高砂市荒井町紙町1-34
TEL 0794-42-4854 FAX 42-4878 毎月第4水曜日午後9時30分~12時

11. 福岡県

福岡市内 : 福岡新生キリスト教会 竹田 浩牧師
〒811-1344 福岡市南区三宅3-33-1
TEL 092-561-4232 毎朝午前5時00分

伊都キリスト教会 友納徳治牧師
〒819-0167 福岡市西区今宿井尻12-4-1
TEL 092-807-9080、FAX 807-2298 毎月第3水曜日7時30分

12. 大分県

別府市 : フルゴスペル イエスキリスト教会 永野誠治牧師
〒874-0933 別府市野口元町10-1
TEL & FAX 0977-26-3692
e-mail:fg.jesus@poppy.ocn.ne.jp
毎週金曜日午後7時30分

13. 沖縄県

那覇市 : ホサナキリスト伝道所 喜瀬慎秀牧師
〒900-0031 那覇市若狭2丁目9-5 毎週土曜日午後6時
TEL 098-868-5641

2001年7月号祈りの焦点

(1) 継続的課題

1) カルト集団である創価学会の日本国の政治に対する支配力が急速に減少するように。

〔解説〕

* 公明党の得票率が落ちています。7月の参議院選挙において公明党が全国的に敗退するように祈る必要があります。

2) 天皇陛下が主イエス・キリストに在って救われ、大いに祝福され、その祝福が遍く日本国民の上に及びますように。また、天皇陛下が世界の諸国民の中であって、祝福の基として用いられますように。そして、国民が天皇陛下を先達として理解し、尊敬して、国際平和のためにつくすように祈りましょう。

〔解説〕

* 「因みに『天皇制』なる用語は天皇否定のために共産党が広めたマインドコントロールの造語（谷沢永一『天皇制という呼称を使うべきでない理由』参照）である。総理の首が毎年替えられても総理が国際マナーに無知でも、両陛下のおかげで政治の安定と国民的統一が辛うじて保たれ、日本の国際的名誉は維持されている。キリシタン迫害が終結し、宣教と福祉、教育活動の自由が認められたのは明治以来歴代諸陛下のお蔭でもある。天皇が原則的に言論・信仰・人権弾圧の専制権力でない限り、反福音的ではあり得ない」（東京純心女子大学教授 澤田昭夫「カトリックの日の丸・君が代反対」より引用）。この澤田教授の所論のとおり、現代における天皇の存在は、キリスト教会が対決すべき相手ではないと見るべきです。

3) 互いに批判し合い、反目し合ってきたキリスト教会とユダヤ人、カトリック、プロテスタント、そしてペンテコステ、および各教派・各教会の間に、悔い改めと和解が起るように。

〔解説〕

日本のカトリック教会とプロテスタント及びペンテコステ諸派の間には、様々の運動においてエキュメニカルな協力が行われています。例えば、

聖霊カリスマ刷新運動において、

福音主義的信仰と霊性を回復し発展させる運動において、

社会主義的改革運動（天皇制反対、靖国反対、正義と平和等）においてです。

しかし、この三つの流れの間では相互に対立・批判が行われています。

ローマ法皇は6月24日ウクライナを訪問し、首都キエフでミサを行い、「カトリックと正教との和解」を訴えました。しかし、ロシア正教会のアレクシー2世総主教はこれをカトリック側の挑発として厳しく反発しました。これはウクライナの東部は正教、西部はカトリックというように伝統的に宗教と文化の違いがあるためです。

エキュメニズム（世界教会一致運動）というのは、多様化を内包した一致であると考えられますので、今は非常な困難がありますけども、聖霊における一致を祈り求めて行きたいと思えます。

4) マルコーシュ・ミッションの働きが進展するように。また、リバイバルの購読部数が2700部に増えましたので、更に5000部へと増えるように。また、リバイバル新聞の内容が更に充実したものとなるように祈りましょう。

5) TV・ラジオ・新聞・雑誌関係者たちがおごりと偏った報道や人権無視の取材を止め、神を畏れたフェアな在り方をするように。これらに気付いた人が抗議や訂正の声をあげ、日本の

見張り人の役を果たすように祈りましょう。

〔解説〕

* マスコミ各社の編集者（デスク）や記者たちには、「日本」という国を現在の存亡の危機から立ち上がらせたいという明確な願望や理念が欠落しているように見えます。小泉内閣が発足してから、わずか二ヶ月なのに、小泉の改革は口先だけで何もしないと、田中外相が親中嫌米だと初めから断定して、反田中キャンペーンを毎日続けるとか、否定的報道が目立ちます。これまでも常に否定的・批判的でした。日本が必要としているのは、時の主要リーダーたちが、どういう哲学と理念とビジョンとをもって何をしようとしているのかを正確に国民に報道することです。バカ騒ぎはもう御免です。

6) 日本に亡国の危機をもたらす少子化傾向がくいとめられ、神の御心にかなった増子化対策が社会全体の祝福によって実施されるように祈りましょう。

「神は彼らを祝福して言われた、《生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ》」(創世記 1:28)。

〔解説〕

* 1930～40年代のフランス、1970年代のイギリスや西ドイツは、いずれも政治の混乱、経済力の低下、社会道徳の頹廃、そして出生率の低下と少子高齢化に悩みました。しかし、ド・ゴールやサッチャーという優れた指導者の登場による国家意識の再生、国家の将来像の展望が与えられ、危機から次第に脱却し、出生率が増加し社会的無気力状態から立ち上がって行きました。日本の出生率は2000年度に前年よりわずかに上昇（1.34～1.35）しましたが、更に上昇するためには明るい日本の未来像が必要でしょう。

(2) 時宜的(タイムリーな)課題

1) 小泉内閣が神を畏れ、日本の進路を誤ることなく、日本国の独立性を確保すると同時に、国際平和に貢献できるような政治を行うように祈りましょう。

〔解説〕

* 小泉内閣に対する関心が高まり、老人から子供まで、そして引きこもりの若者やガングロねえちゃんに至るまで、政治に注目してテレビの国会中継やワイド番組を見ているのはこれまでにない現象です。小泉首相は厳しい構造改革と三年間の経済低成長と倒産や失業に耐え得る日本の国家理念と未来像を示して、国民を勇気づけてほしいと思います。

2) キリスト教会が日本のために殉じた人々や教会員の帰天した人々をおぼえて大切に記念する役割を積極的に果たせるように祈りましょう。

〔解説〕

* 小泉首相の靖国公式参拝の動きの根底にある日本人の心を日本のクリスチャンは理解する必要があります。国のために殉じた人の靈魂を大切にしたいという心は日本人に共通の精神です。しかし、本来、真の主なる神様の崇められるべき所に靖国神社があるのですから、私たちは日本人が偶像礼拝から脱却するように祈りたいと思います。ただ靖国参拝は偶像礼拝だ軍国主義だと言って非難攻撃するのではなく、キリスト教会が創造主であり贖い主である唯一の真の神様の御名において国家のために殉じた人々や教会員で帰天した人々の靈魂を大切に記念することを積極的に担う必要があるでしょう。

(「死者の靈魂に関する研究」皆川尚一(「レムナント」2001年1月、2月、3月号。あるいは、<http://www.sagamiono-ch.or.jp/topic/salvation/salvation.index.htm>を参照)。

3) 日本キリスト教団の中に結成された「聖霊刷新協議会」(代表 手束正昭牧師)が、教団内にカリスマ運動に対する健全な理解を深め、聖霊の御業の大いなる進展に用いられますように。

〔解説〕

* 今年の7月高砂教会で行われる聖霊刷新協議会の全国大会に台湾の聖霊刷新運動幹事の彭徳貴牧師が来日されるとのことです。7月20日の全国大会が成功するように。

4) 日本のとりなしのために強い使命感を与えられている人が、あと1名委員の中に加えられるように。

5) 家庭内暴力と殺人、小学校や路上で子供や女性や老人を襲う殺人・障害事件が続発しています。キリストのいやしと救いが、孤立化して荒れている靈魂に届きませんように。

6) 医療ミス、医療事故が多発しています。医の倫理が確立され実行されるように。

〔解説〕

* 看護婦の数が増やされて、過重労働から解放されるように。

7) 臓器移植法が廃止されるように。

〔解説〕

* ある心臓移植患者の手記「記憶する心臓」(A Change of Heart)によれば、著者のクレア・シルヴィア(Claire Sylvia)はティムの心臓を自分の体内に移植されたのち、ティムの好み、くせ、習慣および記憶など、すなわち彼の人格が自分の中に移植されたことを見出すのです。これは衝撃の事実です！

8) 卵子の提供や代理出産が合法化されないように。

〔解説〕

* 卵子提供や代理出産というのは、自分の卵子が使えなくても子宮に問題がない女性は、他人から卵子の提供を受ければ夫の精子と受精させ、自分で妊娠・出産することができる。子宮に異常があって妊娠できない場合、自分の卵子か他人の卵子と夫の精子による受精卵を他人の子宮に移した代理出産が考えられるというものです。米国では最大手の代理母・卵子バンク「CSP」(ロサンゼルス)があり、韓国でも「DNAバンク」(ソウル)が生まれて、いずれも日本人卵子の提供を求めております。大韓医師協では、4月、医師が関与することを禁じる倫理方針案を発表しました。米国での提供報酬は60万円~120万円です。米国へは毎年100組を超える日本人夫婦が卵子を求めて渡航するそうです。日本国内では、厚生省の専門委員会が、昨年12月、他人からの卵子提供を無償なら認める方針を打ち出しています(朝日新聞6月24日(日)朝刊一面トップ参照)。

9) 日本の学校において、日本の伝統を重んずる良い教科書が選ばれるように。

〔解説〕

* 日本の中学歴史教科書の中で、「新しい歴史教科書」(扶桑社刊)が批判の対象になっていますが、市販のものを読めば、反対論者の攻撃が空転していることがわかります。欲を言えば、もっと書いてほしいことが欠落していて、物足りません。ある女性運動の代表は日本の女性史が欠落していると憤慨していました。超党派の国会議員でつくる「歴史教科書問題を考える会」は、6月29日国会内で総会を開き、小中学校の教科書を採択する市区町村の教育委員会に公正中立な採択を求める決議を行いました(産経新聞6月29日夕刊)。

10) 日本経済が抜本的な構造改革を経て、真に国際競争力を持つ新産業が興されるように。そのためには、なんとしても日本が霊的にリバイバルし、日本国民全体がどんな痛みや混沌の中にあっても、決して主にある希望を失わない強靱な精神力とビジョンを持つことができる

ように。

〔解説〕

日本経済破綻への七つのしるしとして、次のような危機が指摘されています（週刊東洋経済2001年1月20日号より）。

金融システム不安再燃の危機：先日の東京生命破綻にも見られるように、多額の不良債権を抱える金融機関のうち、直接償却できない企業から破綻する可能性があります。特に、株安のおかげで、資産運用利回りが、保険契約者に支払いを約束している保険金支払いの予定利率よりも下回る逆ザヤ現象に苦しむ生保の資産劣化は著しいです。

日本国債大暴落の危機：日本国債の発行残高は、現在約364兆円。これは国民一世帯あたり、約1147万円の負債を負っている計算になります。現在、国際為替市場で、日本国債の利払い率0.595%で、アイルランド国債よりも信用度の低い債券として、高い利回りを払わされています。しかも、この大量の国債のほとんどを銀行に引き受けさせており、そのための原資として、ゼロ金利政策により日銀が大量の資金を銀行に流し込んでいるという構造です。つまりは、預金者である国民の資産で国債を買わせて、国庫を支えさせているということです。しかも、ゼロ金利政策がもたらしかねないハイパーインフレは、高い失業率によって著しく疲弊した国民生活を直撃しかねません。もし、日本国債が完全に信用を失い、国際債券市場で暴落したら、大量に国債を抱える銀行、生保を直撃し、日本の金融システムは崩壊してしまいます。

アメリカの景気が急速に失速し、アメリカの銀行が大量の不良債権を抱え込むようになる?! : 実際、アメリカの株式市場は、現在、ナスダック、ニューヨーク株式市場ともバブル崩壊による暴落傾向をとめることができないでいます。

世界の投資資金、特にユーロ資金がドル離れを加速させるか?! : もし、このまま景気対策の名の下で、アメリカの長期金利が下げつづけると、ますます世界の投資資金はアメリカから逃げるようになり、ドル暴落の危機が現実化します。ドルが暴落し、アメリカ国債の資産価値が下落すると、世界最大のアメリカ国債保有国である日本は、一気に貸し倒れ状態に陥ります。

日米のITベンチャーが総崩れになるか?!

アルゼンチンを初めとする新興経済圏諸国によるの債務不履行（デフォルト）危機の再来か?! : この要因は、特にラテンアメリカ諸国に対する最大の債権国アメリカを直撃します。

中東、バルカン、インドネシアの危機：これらの地域紛争の激化は、完全に世界経済を混乱させます。中東紛争は、石油危機を再燃させ、日本経済を撃ちます。インドネシア危機は、同国に対する最大の資本投資国である日本経済に跳ね返ります。バルカン紛争〔特にマケドニア情勢の悪化〕は、またもやアメリカの軍事負担を増大させ、アメリカ財政にさらにダメージを与えかねません。

11)日本の頭脳を国家更正のために総結集できるように祈りましょう。また、日本のキリスト教会がキリストに在る真の愛国者や、売名や利権に走らないでその財力を神と国家のとに献げる金持を育てることができるよう祈りましょう。

12)日本政府がペルー元大統領フジモリ氏と義弟の元駐日大使アリトミ氏をペルー政府に引き渡さないように祈りましょう。

〔解説〕

* 諸悪の根源モンテシノスが自分の罪に対する減刑を謀り、公金横領の罪の一部をフジモリ氏やアリトミ氏になすりつけて、ペルー政府に彼らを売り渡そうとしているようです。（産経新聞6月28日朝刊5面）

13)イスラエルの平和のために。(詩篇 125:5)

〔解説〕

- *ユダヤ人がメシヤ・イエスを信じて救われるように。
- *アラファトが停戦合意を忠実に実行し、インティファダ(民衆蜂起)を完全に停止させ、シャロン首相との話し合いのテーブルにつくように。
- *PLOを含めた世界各国が「エルサレムはイスラエルの首都」と承認するように。
- *シャロン首相をオランダ国ハーグの国際戦犯法廷に戦犯として訴えようという PLO の動きがあります。このような告訴が行われないように。
- *PLO が子供たちに反ユダヤ思想を教育するのをやめ、平和共存の思想を教えるように。



《会計報告》(2001年4月21日～5月31日)

(単位 = 円)

| 収 入 | 金 額 | 支 出 | 金 額 |
|-------------|---------|-------------|---------|
| 献 金 | 54,020 | 交 通 費 | 39,120 |
| | | 印 刷 費 | 1,640 |
| | | 資 料 費 | 20,780 |
| | | 郵 送 費 | 20,640 |
| | | 事 務 費 | 0 |
| | | 振替手数料 | 400 |
| | | 電 話 料 | 8,895 |
| 小 計 | 54,020 | 小 計 | 91,475 |
| 前月繰越 | 88,699 | 翌月繰越 | 51,244 |
| 国内活動基金 収入 | 0 | 国内活動基金 支出 | 0 |
| 前月繰越金 | 15,700 | 翌月繰越金 | 15,700 |
| 国際会議参加基金 収入 | 0 | 国際会議参加基金 支出 | 0 |
| 前月繰越金 | 35,474 | 翌月繰越金 | 35,474 |
| 合 計 | 193,893 | 合 計 | 193,893 |

【献金者芳名】(順不同)

| | | | |
|---------------|----|------------|----|
| 高砂教会(兵庫) | 2回 | 川田哲裕(兵庫) | 1回 |
| 日之出キリスト教会(大阪) | 1回 | 林実(神奈川) | 1回 |
| 相模大野教会(神奈川) | 1回 | 赤羽根恵吉(神奈川) | 1回 |
| 佐藤節代(神奈川) | 1回 | | |

【編集後記】

- * ニュースレター7月号をお送りします。トップレポートは行澤一人(かずひと)師(単立 日之出キリスト教会伝道師。神戸大学法学部助教授)が執筆して下さいました。
- * 「日本の『民族的贖い』のために」というテーマは、これまでの個人主義的な靈魂の救いを目指す宣教論の枠組みを大きく変える共同体的宣教論とも言うべきユニークなものであると思います。
- * 従来の「日本的キリスト教」や「日本神学」とは違う、聖書に基づく創造論、人間論に基礎づけられたキリスト教的国家観や文明論の可能性を探求する興味深い論文です。
- * カルヴァンやバルトの神学では果たして「キリスト教文化」という概念は成り立つだろうか? と否定的に論じられたものですが、行澤先生の神学では人間の神の子としての賜物は、サタン

の支配下にあっても失われていないとしているので文明文化というものを肯定的にとらえることができると思われます。

- * ユーゴスラビアのミロセビッチ大統領がコソボにおけるアルバニア人虐殺の罪で、オランダ国ハーグの国際戦犯法廷に売り渡されました。彼はアザゼルの山羊でしょうか。あの虐殺はアメリカ(ゴア氏とオルブライト氏)が組織し、訓練してコソボに送り込んだアルバニア人ならず者部隊によるでっち上げであると言われます。そのアルバニア人武装勢力は、更にマケドニアに侵入していて、NATOの援助をマケドニアは求めましたが、成功していません。英米のバルカン制覇が勝つでしょう。
- * もう直ぐ、日本のアザゼルの山羊たちを記念する8月15日がやってきます。

(ヨハネ 皆川尚一記)

《次回日本のとりなし委員会予告》

日時：2001年7月23日(月)12時30分

場所：日本キリスト教団 高砂教会

